

東日本大震災シンポジウム

福島原発事故からの帰郷への構図

—日本人にとっての“ふるさと”の創生—

東日本大震災からの復興は、日本中の人々がこころを向けている大きな課題です。このシンポジウムは、「日本人にとっての“ふるさと”の創生」をテーマに、被災から復興への、あの時・今を語り合い、大地の汚染、人々の心身の傷つき、先が見えない不安の中で、大人も子どもたちも生きているという現実を見つめ、日本という国土を持つ我々の共通の課題として、未来への光を探る場にしていきます。

< 基調講演 >

不破敬一郎（東京大学名誉教授）

「原子力発電のはじまりと将来」

柴田康行（国立環境研究所主席研究員）

「放射能と福島原発事故」

開催日 2013年

5月12日(日)

< シンポジウム >

話題提供

鈴木恵一（福島県大熊町教育委員会指導主事）

林洋一（福島県大熊町立大野幼稚園

熊町幼稚園園長）

船橋晴俊（法政大学社会学部教授

サステナビリティ研究所所長）

ディスカッサント

不破敬一郎（東京大学名誉教授）

柴田康行（国立環境研究所主席研究員）

豊田園子（豊田分析プラクシス）

司会

安島智子（このはな児童学研究所）

主催 NPO 法人 このはな児童学研究所

場所 日本交通協会大会議室

時間 10:00～17:00

参加費 3000円（基調講演のみ1000円）

懇親会 18:00～（会費別途）

参加申し込みは、HP（申込フォーム）、メール、
又はFAXでお願い致します。

HP：<http://www.konohana.jp/>

E-mail：konohana@konohana.jp

< 問い合わせ先 >

〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-26-2-403

NPO法人 このはな児童学研究所内 東日本大震災シンポジウム 準備委員会事務局

TEL:03-3639-1790 FAX:03-3639-2968

後援 千代田区 日本地球環境人間科学研究所

福島原発事故からの帰郷への構図

—日本人にとっての“ふるさと”の創生—

プログラム

< 講演会 >

- 10:00 開会の挨拶 安島 智子 (このはな児童学研究所)
10:05 講演 「原子力発電のはじまりと将来」
講師：不破 敬一郎 (東京大学名誉教授、環境放射能除染学会会長)
10:55 講演 「放射能と福島原発事故」
講師：柴田 康行 (国立環境研究所上級主席研究員)
- 11:45~13:00 昼休み

< シンポジウム >

- 13:00 シンポジウム
シンポジスト：
鈴木 恵一 (福島県大熊町教育委員会指導主事)
林 洋一 (福島県大熊町立大野幼稚園・熊町幼稚園園長)
船橋 晴俊 (法政大学社会学部教授、サステイナビリティ研究所所長)
- 15:35 ディスカッション
ディスカッサント：
柴田 康行 (国立環境研究所上級主席研究員)
豊田 園子 (豊田分析プラクシス)
不破 敬一郎 (東京大学名誉教授、環境放射能除染学会会長)
- 16:20 全体ディスカッション
司会：安島 智子 (このはな児童学研究所)
- 18:00~ 懇親会

案内地図



会場 日本交通協会大会議室

〒100-0005

東京都千代田区丸の内 3-4-1 新国際ビル 9F

アクセス地図：<http://www.kotsu.or.jp/bp/root/room/>

地下鉄 有楽町線「有楽町」駅 D3 出口直結

JR「有楽町」駅国際フォーラム出口徒歩2分

地下鉄 日比谷線「日比谷」駅 B3 出口から徒歩2分

東日本大震災から、2年がたちました。このシンポジウムでは、原発事故によって住民は帰るべき大地を失ってしまったという事実を踏まえ、この被災からの復興をいかに成しとげることができるのか、可能性と方向性を探りたいとの願いを持って企画いたしました。

原子力発電とは、放射能の真実とは、除染といかにかわるか。故郷への帰郷を果たすためには、あまりにも大きな問題ではありますが、この困難の本質を見据えて取り組むことに接近するシンポジウムが実現いたしました。

午前の部では、原子力発電とは何か、放射能の真実とはいかなるものであるのか知りたいと思います。不破敬一郎先生をお招きいたしました。不破先生は、昭和31年から12年間、ハーバード大学医学部の研究員としてマンハッタンプロジェクトのメンバーを仲間として研究生活をされ、特に分光部門主任として活躍された世界的な科学者でいらっしゃいます。その不破先生には、宇宙、元素、地球、生命の起源と原子力エネルギー等を視野にいたした「原子力発電のはじまりと将来」についてお話いただきます。続いて、今まさに福島原子力発電所事故にかかわっておられる国立環境研究所環境計測研究センター上級主席研究員の柴田康行先生より、福島原子力発電の事故の現実をお話いただきます。

午後の部では、原発から3キロの地点にあり、帰宅困難地域となっている大熊町からご発信いただきます。現在大熊町の町役場は会津若松市へ避難し、2868人（2013年1月31日現在）の大熊町町民が会津若松市の皆様の暖かな迎えを得ることができました。しかしながら、大熊町に帰ることができない町民の苦しみは計り知れないものであると思います。会津若松への避難途中から避難後を通し、教育の場（幼・小・中）である学校が子どもたち、保護者を抱え守り、避難中であってもしっかりと教育を成すことができるように、ものすごいチームワークで頑張っておられます。その陣頭指揮をとってこられました鈴木恵一指導主事、林洋一幼稚園長をお迎えいたしました。大熊町が会津若松市の協力を得て存続できているということは、学校を信頼し子どもたちと共に学校に町民が集まることのできたことによるものと、私には思われます。

続いて社会学者船橋晴俊先生にご登壇いただきます。船橋先生は、社会的決定や政策決定のため条件として、「一つの声」unique voiceの成立の重要性や、「公共圏」の概念を説き、「あるべきエネルギー政策をめぐるアリーナと公共圏」の姿を描き出されています。直近では単著論文2013「高レベル放射性廃棄物という難問への応答-科学の自律性と公平性の確保」『世界』（2013年2月号：33-41）を書かれています。大熊の方々の帰郷への構図を描き出したいと思います。

ディスカッサントとしてご登壇いただく豊田園子先生は、フランス文学に造形が深いユング派の精神分析家です。原発事故と人間の魂、宗教性に触れる問題は簡単に近づくことができない繊細な神経と深い愛が求められる事柄ですが、怒りや傷つきや悲しみの中に生まれる「声」に耳をすましたいと思います。豊田園子先生には、不破先生、柴田先生と共に討論をしかけていただきます。

最後にご登壇いただいた全員と、フロアーからのご発言も期待した全体討論を考えています。不破先生が放射能廃棄物を処置する場所として岩盤のしっかりした所に地下3000メートル掘り下げる必要があるとおっしゃられたことがありました。私達の精神の大地も同じように深く掘り下げることによって、子どもたちに残す日本の大地を創造することができるのかもしれませんが。

司会は、安島が務めさせていただきます。（安島記）